



1982年(昭和57年)
9月号(No.447)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価一部 150円

目次

- 第一回支部間懇談会(1)
- ラインホルト・メスナーをめぐって(2)
- 海外委員会第四、五回例会(2)
- 東アフリカにおける山岳会の現状 加藤大幸
- 私の歩いたイタリアの山々 牧野文子
- 図書紹介(4)
- 「山と谷へ」「Ways to the Wilderness」「Land of Mountains」
- 科学研究委員会第十三回講演会(5)
- 「山岳における危機」 J.D. Ives 氏
- 国際山岳会会長
- 東西南北(7)
- お知らせ(9)
- 指導委員会・青年懇談会
- 図書委員会、海外委員会、フィルム委員会
- 報告(10)
- 北海道支部
- 山岳洋書購入のお知らせ(つづき)(10)
- 山岳報告・ルーム日誌・会員移動他(10)
- カット等/芳野満彦・吉阪隆正・松本慎太郎

▶日本山岳会事務取扱時間

月、火、木、土曜 10時～20時
水、金曜 13時～20時

日曜・祭日は休み

▶図書室開室時間

日曜・祭日・月曜を除く毎日 13時～20時

第一回支部間懇談会

長野県、諏訪湖畔にて

昨年五月、佐々会長が就任するにあたり、日本山岳会の重要な課題の一つとして「支部間交流による山岳会の発展と充実」を説かれた。

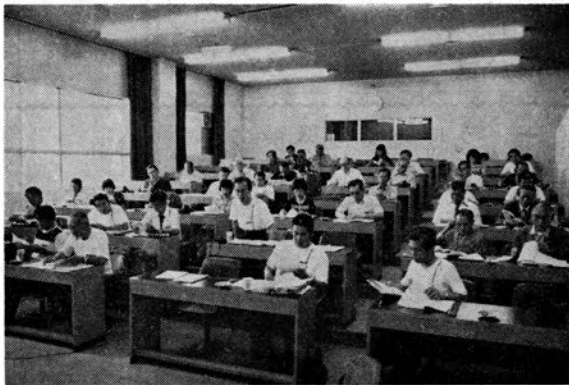
今回、その具体的な方策として各支部会員の交流と親睦、自由な意見の交換を通じて山岳会の活性化を図りたいとの主旨で、総務財務委員会が準備にあたり、去る六月十九、二十日の両日、長野県岡谷市の諏訪湖畔にある「諏訪湖ハイツ」において、第一回の支部間懇談会が開催された。

幹事の東京からは、佐々会長、折井前副会長を含めて十三名。北の山形から西は関西までの十支部三十四名、合計四十七名による懇談会は、梅雨ときにもかかわらず

快晴の続く毎日で、対岸より湖面をわたって吹く風の涼しく心地良い湖畔で、明日の山岳会について真剣に、ときにはなごやかなうちに、討論がくりひろげられた。

一日目の十九日は午後四時に現地集合し、湖の展望出来る諏訪の温泉で、のんびりと汗を洗いおとし、ユカタ姿で階段状になっている会議場に集まってくる。東京の会員は、全員が揃いの山岳会Tシャツを着用している。そして六時石橋支部担当委員の司会で始められた。

先ずは、支部に精通しておられる折井前副会長の講話「思い出の支部交流」で、従来から支部長会議、支部主催の行事などを通じてその交流を深めて来たこと、戦前の関西支部の設立、戦後の東海支部



支部間懇談会会議場、1982、6月

部設立にふれ、それぞれの設立の動機、歴史、目的、そして人的構成の違いなどを話され、更に、信濃支部設立当時の話や長野県人の気質などにもふれ、ユーモアもまじえての興味深い話が続いた。

映画も上映される。これは日本山岳会のライブラリーの中でも貴重なフィルムで、会員の国分勘兵衛氏寄贈による「一九二四年英国マロリーとアーヴィンが頂上に向かったまま還らざる人となった、あの世界的に有名な登山隊の記録フィルムは、初めて観る会員がほとんどであった。自らも二年前に隊員として、同じ北面からエヴェレストに挑んだ伊丹総務担当理事の解説は、全員を六十年前の登山にタイムスリップさせるような興味

快晴のうちにむかえた二十日の本会議は、朝食の後に全員の記念写真。そして八時三十分、佐々会長の挨拶、神崎総務担当理事の基調報告で本会議が始まる。この会議の「意義とねらい」は、支部間の交流、合同企画による催物などは、ややもすると計画だおれになりがちであるが、それを確実に推進するには、各支部間において正しい意識のもとに、積極的な姿勢で取り組んでいかなければならぬ。はつきりした支部交流の価値

山をきれいに「三」は持ち帰ろう

留守番電話(電話番号24-165九)
奮と感動を与えるのであった。
七時すぎには和室「富士見の間」に場所を移し、懇親会が開かれる。佐々会長の挨拶に始まり、山梨支部百瀬舜太郎永年会員の音頭で乾杯、なごやかなうちに宴に入る。総務委員会の委員長をつとめる坂本の司会で、各支部の紹介があり、旧知、初対面の会員たちの歓談が夜遅くまで続いた。最後は会長を中心に、老いも若きも肩を組んで唱い、明日の山岳会を語り合う諏訪湖の一夜は、まったく支部間交流の幕開けにふさわしい、翌日の本会議への充分な気持の盛り上がりを見せた。

感をつかむことが当面の目的かとも思うが、手さぐりの中でも何かをやらなければ真の価値感は見出せない。行動してみなければ先に進まないと言うのが現実かと思う。今回のこの会が、日本山岳会における新たな活力となることを期待する。と、お互いの理解と協力を求める。

五十六年度総会の事業報告を伊丹理事が、財務報告を西村財務担当理事が行なう。

次いで日本山岳会への提言として、明日の課題とか運営問題、最近の日本山岳会に対して感じていること、などを次の六氏が述べられた。

折井前副会長、山本(静岡)、斎藤(越後)、村上(山形)、中島(福島)の各支部長と湯浅東海支部会員で、その要旨は、

(1) 支部所在の地方会員に喜ばれるような文化的行事の開催。
(2) 東北地方において、青森にも支部設立を進めるとともに、東北支部のブロック会議を開きたい。また、このような会員懇談会の開催も計画したい。

(3) 支部への還元金の再考。

(4) 支部の充実と発展の一つとして、ルームをもつ必要がある。本部のルーム購入借入金返済の後、援助を考慮して欲しい。

(5) 会員、特に地方会員への文獻コピーのサービスを検討。

(6) 二十年、三十年先の日本山岳

会を考え、組織の若返りを図ってもらいたい。若い人達の意見に理解を示し、それを反映出来る組織としてもらいたい。

(7) 地方在住会員が上京した際に理事会、評議員会を傍聴出来るよう考慮して欲しい、などの提言があった。

引き続き、各支部の実務者レベルによる「支部報告」に入る。関西支部の桑田結会員が議長となり北の北海道より順に現状が報告される。

△北海道支部(報告 佐々保雄)

各支部をブロックに分けて、支部長会議や支部の懇談会を開き、それぞれの意見を中央の役員がまとめるようにすると、出席率も良くなるし、貴重な意見も多く聞けるのではなからうか。北海道は婦人会員が少ない点と老人が増えていること、この対応を考えたい。来年は支部設立十五周年を迎えるので、知床、羅臼方面の記念山行を計画したい。

△山形支部(報告 村上勝太郎)
支部会員三十二名で、実働は二十名前後である。会員を増やして動きを活発にしたい。今秋九月に東北地区会員親睦山行を、秋田支部の担当で行なう。今後このような形で、地区別による集会などで交流を強めて行きたい。

△福島支部(報告 後藤泰治)
財政が乏しいので行事にも制約がある。若い会員も増えているの

ライホルト・メスナー

をめぐって

メスナーのこの十三年の歩みをまとめてみる。
ナンガバルバット(一九七〇年)、マナスル(七二年)、ガッシャブルム(七五年)、エベレスト無酸素(七八年)、ナンガバルバット単独(七八年)、K2(七九年)、チョモランマ単独(八〇年)、シヤパンマ(八一年)、カンチェンジュンガ無酸素(八二年)。そして日山協隊が唯一の空白部であったチョゴリ北面から無酸素で登頂したという時点で、登山はまた新たな分岐点に立ったと思う。

スポーツは極度に尖鋭化している。陸上競技で一、三分の壁を突破、その未知の部分の開拓を起点として、一、二分は再び熾烈な争いが展開されている。八一年のメスナーのチョモランマ三日間単独登頂、八二年のチョゴリ北面開拓を起点として、再び、次元を高めて登山の尖鋭化も、ということだ。

メスナーの能力を数字に直した例として、高所医学者のグリフ・ピューは二十人のヒマラヤ経験者の酸素摂取能力のマキシマム平均値を、一分間、体重一、四当り50リットルとはじきだしたが、「メスナーやハーベラーは70から80」と推定した。これは二人の無酸素エベレスト登頂時の「マウンテン」誌のインタビューに答えたものが、「トレーニングで10%(55)は高められるが、この二人は超人的」と舌を巻いた。しかし一般的

に登山家は体力医学には無関心のようなことも指摘した。

日本でも、メキシコ五輪に対処して、乗鞍で実験した、陸上のランナーと高度に慣れている登山家の比較でも後者のベテランでさえかなり劣ることが測定されている。いま岩登り競技でタイムを競い、低圧酸素実験の設備も各所に設けられているが、「日本の登山家ももっと体力医学に目を向けるべきではないか」というのは大森ドクター。オーストリアのロバート・シャウアーがエベレストに登頂、彼自身三つの八千級登頂(一九七五年のヒドン・ピーク、七六年のナンガバルバット)を果たしとき、「(当時)オレはまだ二十四歳、メスナーはもう三十四歳」と、メスナーに挑戦状を叩きつけたものだが、これらトップクラスの戦列から日本の若ものも脱落しないためにもと、提言した。

メスナーを頂点とする、最近流行のアルパイン・スタイルの原点を、ダグ・スコットは一八八三年のW・W・グラハムに求めている。彼は「科学調査よりも、もっとスポーツ的、冒険的に」と、三人のガイドを連れて、シッキム、ガルワール、そしてモンスーン後のカンチェンジュンガに取って返した。ついでママリ、ロングスタッフ、シブトン、ティルマン……。もはやヒマラヤは「アルパイン・ブレイグラウンド」である。「アドベンチャーの領域に果てはない」(ママリ)が、これに対処するには、より科学的な裏付けが必要である。

(片山金平)

海外委員会第四回例会

(四月八日(木)午後七時十分よりルームにて)

東アフリカにおける

／JCB)が活躍している。この山岳会は、キリマンジャロ山、ケニア山に関する数々の書物、資料を出版しており、「南アフリカ山岳会」とともに、アフリカを代表する山岳会と言って過言ではな

で、四十周年には福島市内のデパートで山岳会展を開催したい。

△越後支部(報告 鈴木敏雄)
年間の行事としては、七月二十五日に「高頭祭」を弥彦で、十一月の第一週か二週の土、日に、藤島玄さんを囲む「玄山会」を開いている。県内に八十三の山岳団体があり、この主メンバーはほとんどがJAC会員であるので、山行はそちらに任せている。

△信濃支部(報告 蒲生明登)
JAC主催の「ウェストン祭」集会委員会の山菜山行と行事が続

△岐阜支部(報告 高橋達雄)
昨年は創立十周年記念の御岳記念登山を行なった。現在は年一回、文化的行事と講演会を開催し、今年は七月にJACフィルムを借りての映画会を行なう。

△山梨支部(報告 斎藤俊哉)
四十八年に支部が再建され、現在六十名の会員数である。ほとんどが自分の山岳会をもっており山行はそちらに任せている。行事は四月二十日前後の深田祭(華崎観光協会と共催)、十月第三土、日曜の木暮祭(増富観光協会と共催)がある。

△新潟支部(報告 尾上 昇)
海外登山を目指す人たちが中心となって創立。実践だけの集団として二十周年を迎えたが、支部員数の増加で、新しい生き方を模索中である。国内外の登山の実践、自然保護運動、出版、他団体との交流や活動に力を入れている。また、ルーム設置の三ヶ年計画で、具体的に動いている。

△静岡支部(報告 市野 弘)
創立は昭和二十五年、毎月第二土曜日の夜に静岡駅前の神社社務所で集会を開いている。現地集会の「紅葉会」は、支部長の「南アの静岡側を紹介したい……」との主旨で毎年秋に開かれるが、今年は二十五回にあたり、自然保護委員会の現地集会と合わせて開催さ

△富山支部(報告 石坂久忠)
播隆上人碑は予算を二億円前後とみて、建設計画はすでに場所の選定に入っている。クラブルームは過去に持ったこともあるが、管理と運営に問題があって、放棄された。いずれは所有することも考えているが、持つことは容易でも管理と運営の出来る体制づくりが重要であろう。

△関西支部(報告 小林治俊)
毎月の月例会では、大峰、比良、六甲、篠山、播磨などの山行を、年間計画をたてて実行している。会員数も多く、委員以外との

△東京支部(報告 高橋達雄)
昨年は創立十周年記念の御岳記念登山を行なった。現在は年一回、文化的行事と講演会を開催し、今年は七月にJACフィルムを借りての映画会を行なう。

△山梨支部(報告 斎藤俊哉)
四十八年に支部が再建され、現在六十名の会員数である。ほとんどが自分の山岳会をもっており山行はそちらに任せている。行事は四月二十日前後の深田祭(華崎観光協会と共催)、十月第三土、日曜の木暮祭(増富観光協会と共催)がある。

△新潟支部(報告 尾上 昇)
海外登山を目指す人たちが中心となって創立。実践だけの集団として二十周年を迎えたが、支部員数の増加で、新しい生き方を模索中である。国内外の登山の実践、自然保護運動、出版、他団体との交流や活動に力を入れている。また、ルーム設置の三ヶ年計画で、具体的に動いている。

△信濃支部(報告 蒲生明登)
JAC主催の「ウェストン祭」集会委員会の山菜山行と行事が続

△岐阜支部(報告 高橋達雄)
昨年は創立十周年記念の御岳記念登山を行なった。現在は年一回、文化的行事と講演会を開催し、今年は七月にJACフィルムを借りての映画会を行なう。

△山梨支部(報告 斎藤俊哉)
四十八年に支部が再建され、現在六十名の会員数である。ほとんどが自分の山岳会をもっており山行はそちらに任せている。行事は四月二十日前後の深田祭(華崎観光協会と共催)、十月第三土、日曜の木暮祭(増富観光協会と共催)がある。

△新潟支部(報告 尾上 昇)
海外登山を目指す人たちが中心となって創立。実践だけの集団として二十周年を迎えたが、支部員数の増加で、新しい生き方を模索中である。国内外の登山の実践、自然保護運動、出版、他団体との交流や活動に力を入れている。また、ルーム設置の三ヶ年計画で、具体的に動いている。

△静岡支部(報告 市野 弘)
創立は昭和二十五年、毎月第二土曜日の夜に静岡駅前の神社社務所で集会を開いている。現地集会の「紅葉会」は、支部長の「南アの静岡側を紹介したい……」との主旨で毎年秋に開かれるが、今年は二十五回にあたり、自然保護委員会の現地集会と合わせて開催さ

△富山支部(報告 石坂久忠)
播隆上人碑は予算を二億円前後とみて、建設計画はすでに場所の選定に入っている。クラブルームは過去に持ったこともあるが、管理と運営に問題があって、放棄された。いずれは所有することも考えているが、持つことは容易でも管理と運営の出来る体制づくりが重要であろう。

△関西支部(報告 小林治俊)
毎月の月例会では、大峰、比良、六甲、篠山、播磨などの山行を、年間計画をたてて実行している。会員数も多く、委員以外との

△東京支部(報告 高橋達雄)
昨年は創立十周年記念の御岳記念登山を行なった。現在は年一回、文化的行事と講演会を開催し、今年は七月にJACフィルムを借りての映画会を行なう。

△山梨支部(報告 斎藤俊哉)
四十八年に支部が再建され、現在六十名の会員数である。ほとんどが自分の山岳会をもっており山行はそちらに任せている。行事は四月二十日前後の深田祭(華崎観光協会と共催)、十月第三土、日曜の木暮祭(増富観光協会と共催)がある。

△新潟支部(報告 尾上 昇)
海外登山を目指す人たちが中心となって創立。実践だけの集団として二十周年を迎えたが、支部員数の増加で、新しい生き方を模索中である。国内外の登山の実践、自然保護運動、出版、他団体との交流や活動に力を入れている。また、ルーム設置の三ヶ年計画で、具体的に動いている。

△信濃支部(報告 蒲生明登)
JAC主催の「ウェストン祭」集会委員会の山菜山行と行事が続

△岐阜支部(報告 高橋達雄)
昨年は創立十周年記念の御岳記念登山を行なった。現在は年一回、文化的行事と講演会を開催し、今年は七月にJACフィルムを借りての映画会を行なう。

△山梨支部(報告 斎藤俊哉)
四十八年に支部が再建され、現在六十名の会員数である。ほとんどが自分の山岳会をもっており山行はそちらに任せている。行事は四月二十日前後の深田祭(華崎観光協会と共催)、十月第三土、日曜の木暮祭(増富観光協会と共催)がある。

△新潟支部(報告 尾上 昇)
海外登山を目指す人たちが中心となって創立。実践だけの集団として二十周年を迎えたが、支部員数の増加で、新しい生き方を模索中である。国内外の登山の実践、自然保護運動、出版、他団体との交流や活動に力を入れている。また、ルーム設置の三ヶ年計画で、具体的に動いている。

△静岡支部(報告 市野 弘)
創立は昭和二十五年、毎月第二土曜日の夜に静岡駅前の神社社務所で集会を開いている。現地集会の「紅葉会」は、支部長の「南アの静岡側を紹介したい……」との主旨で毎年秋に開かれるが、今年は二十五回にあたり、自然保護委員会の現地集会と合わせて開催さ

△富山支部(報告 石坂久忠)
播隆上人碑は予算を二億円前後とみて、建設計画はすでに場所の選定に入っている。クラブルームは過去に持ったこともあるが、管理と運営に問題があって、放棄された。いずれは所有することも考えているが、持つことは容易でも管理と運営の出来る体制づくりが重要であろう。

△関西支部(報告 小林治俊)
毎月の月例会では、大峰、比良、六甲、篠山、播磨などの山行を、年間計画をたてて実行している。会員数も多く、委員以外との

△東京支部(報告 高橋達雄)
昨年は創立十周年記念の御岳記念登山を行なった。現在は年一回、文化的行事と講演会を開催し、今年は七月にJACフィルムを借りての映画会を行なう。

△山梨支部(報告 斎藤俊哉)
四十八年に支部が再建され、現在六十名の会員数である。ほとんどが自分の山岳会をもっており山行はそちらに任せている。行事は四月二十日前後の深田祭(華崎観光協会と共催)、十月第三土、日曜の木暮祭(増富観光協会と共催)がある。

△新潟支部(報告 尾上 昇)
海外登山を目指す人たちが中心となって創立。実践だけの集団として二十周年を迎えたが、支部員数の増加で、新しい生き方を模索中である。国内外の登山の実践、自然保護運動、出版、他団体との交流や活動に力を入れている。また、ルーム設置の三ヶ年計画で、具体的に動いている。

山岳会の現状

講師 加藤大幸委員

私が赴いた東アフリカ三国、タンザニア、ウガンダ、ケニアを国別にまとめてみる。

・タンザニア

ご存知、アフリカ大陸最高峰、キリマンジャロ山の君臨するこの国、建国以来社会主義政策をとっている。経済発展途上にある若きタンザニアでは、民間レベルでの山岳会は未だ育ち難く、数年前まで、ダルエスサラーム大学内に私的な山岳会(DAR-ES-SALAAM CLIMBING CLUB)が存在したのに留まる。もっとも、一九六一年建国時には、意気盛んなキリマンジャロ山岳会が活躍しており、活動の盛んな時代もあった。現在はアール・シャの高等学校に、教課のひとつとして登山教室が実施されている程度で、主な活動の記録は見当たらない。

・ウガンダ

一九七九年、時のアミン政権が崩壊して以来、東アフリカの貴重な山岳会「ウガンダ山岳会」(UGANDA CLIMBING CLUB)も姿を消した。今は、主都カンパラの旅行会社の支配の下、ガイド、ポーターを調達する組織として、そろじてその姿を留めているのみである。同じカンパラの東アフリカ最古の大学、マケレレ大学内に「登山学校」(UGANDA CLIMBING-SCHOOL)が現存するが、その実態を私は十分に把握していない。今後の課題と考えている。

・ケニア

東アフリカのみならず、アフリカ諸国の中で、群を抜いた経済上の発展を果たしつつあるケニアにおいては、前述二国をはるかに上回る動向が見られる。主都ナイロビには、企業単位の山岳会が在り、一方でケニア山等の登山許可の権限を有する「ケニア山岳会」(KENYA CLIMBING CLUB)が

い。しかし、会の管轄するガイドの職を全てイギリスが握り、イギリス人ガイドの同行なしには主要な峰への登山許可が降りないなど、この山岳会がケニアに本当に根を生やしたのか否か、疑問の向きもある。

アフリカ大陸は広い。五十余りの国々の中で私が訪れた国はわずか三国。今後、より多くの国々や山々をめぐる、アフリカの正しい姿、数多くの魅力の紹介に努めたい。

* * *

海外委員会第五回例会

〔六月三日(木)午後六時三十分よりルームにて〕

私の歩いたイタリアの山々

講師 牧野文子委員

国土がさほど大きくもないのに、北から南へ長いイタリアは、山もさまざまに変化に富み、北西部の西アルプス、北の国境の山、東部のドロミティ・アルプス、これら西と東とでも大変違っている。また北から南へ半島を縦走しているアッペンニン山系中、リグリア海沿いのアプアーネ・アルプス、そしてアッペンニン山系南端の山塊、それから地中海最大の島シチリアのエトナ山、サルデーニャ島、コルシカ島(現仏領)の山など、山容がそれぞれ違っているのを、約半年ずつ三回の渡伊に見た。

西アルプスは、モンテ・ピアンコ、モンテ・チエヴィーノ、モンテ・ローザ、グラン・パラディンなどの大山塊に囲まれた広大なアオスタの谷を歩いて、ほぼ西アルプスの雰囲気をつかめた。スイスとの国境のグラン・サン・ベルナルド峠は、ローマ時代からの要路でアオスタの谷へ通じ、そのクールメーニールは、イタリア側アルプスの最も古い有名な基地で、冬季スポーツの中心地である。谷南のグランパラディン山は国立公園

接触が少なくなりがちなので、年四回の支部報発行、草の根運動のような日々のつき合いを心がけている。来年の中国「ボゴダ峰」登山は関西支部が中心で計画、若い世代の入会者の増えることを期待している。ルームも早くもちたか思っている。

それぞれの支部の置かれている特殊な状況の中で、会務にたずさわる人達の「生」の声を聞かされ共通する問題には大きくうなづきあい、運営の苦勞を共に分かち合った。

実務の報告の後には、東海支部の中世古会員が議長となって、一時間の意見交換が行なわれた。

(1) 地方在住会員の支部未加入問題

(2) 支部活動の充実とルーム整備

(3) 支部への還元金

などの意見があり、特に(1)の問題については多くの時間が費されその関心の強さは、東京で会務にたずさわっている人達には予想以上のことであった。地方在住の未加入会員を支部に加入させる努力を本部でとってもらいたい。会費未納は除籍となるが、支部会費は未納でも会員の権利はある。会費を一率にして、その差額を支部会費として還元し、支部活動を充実させるべきではないか。これらの真剣な意見については、早晩、なんらかの解決方法を考えねばならぬと思う。

一時間では短すぎる意見の交換であり、議題が山積みされているような状態ではあったが、会場の都合もあり、会議のまとめとして最後に坂本が次の事項を発表した。

「支部間の交流による山岳会の発展と充実」が、今後の日本山岳会の課題と考え、今回は全国三七〇〇名会員の一体化を図るため、各支部に呼びかけて会合をもった。総務財務委員会は会員へのボランティアとして「本部と支部会員のパイプ役」となりたい。今回の懇談会はJACにとって非常に有意義な提言も多くあり、今後の会務運営に大いに役立つと思う。支部より提言された意見のうちより、△検討事項▽として

1、支部のルーム購入の促進

2、役員の活性化

3、支部運営の改善(運営費、支部員の把握と組織化)

4、文献の複写サービス、フィルム等の貸出しや講師の派遣

5、海外登山への協力(来年のソ連、韓国との交流登山への参加)

△決議事項▽としては

コミュニケーションの確立—本部、支部の事業計画の緊密化

前日の折井前副会長の講話の中で、「支部によっては地域が大き

く、行政と違って一本にまとめるのは難しい問題であるが、伝統の園で、動植物の宝庫といわれている。北のオーストリアとの国境のブレンネル峠もイタリアへの古くからの要路で、ボルツァーノへ通じている。そのボルツァーノは、ドロミティ山系の西の基地で、東の基地コルチナ・ダンベッツとの阿基地をつないでいる道は、ドロミティ大街道と称してヨーロッパで有名である。この街道を通るだけでも、右に左にさまざまな岩峰が山裾の緑の森の上にそびえ、その上に青空のコントラストが美しい。またドロミティの山の岩は白っぽいので、光線によって変化する。そうした美しさに魅了されたわれわれは、毎日マライーニさんの好意で彼の山の家を基地にして山を歩き、夫は花や山を描いてある日本山岳会のことだ。伝統は古いものに新しいものを加えることで成り立って行くものと考えている。日本山岳会には暖かい人の交流があり、私の山岳会における四十四年間のクラブライフで知り得た多くの友人は、私の最大の、そして唯一の財産となっている」と話されているところがある。たしかそれぞれの支部が本部に求めるものは多様で、その平均をとるのは難しいことではある。暖かい人の交流を生かし、そして第一回支部間懇談会の決議事項を生かして、本部が……、支部が……、と云うことでなく、全体的な力で育てて、来年も、そして毎年この懇談会が続くことを願うものである。

た。アルピ・アプアーネでは、大理石の山に登って、大理石の埋蔵豊かな山容を知ることができた。アッペンニノ山脈最高峰のグラン・サッソ・ディタリアと、それへの荒涼とした広大な高原は、日本の山で見ることのない景観であったのは、第二次欧州大戦のイタリアの悲劇の舞台であったことを知って印象深かった。海路シチリアへの途中のストロンボリ登山は果たせなかったが、エトナ火山には登ったこと、サルデーニャ島の山地もあちこち歩き、仏領コルシカの山も歩いて、大体イタリアの山々がどのようなのか心に刻むことができた。

それぞれ新しい課題をもって。

参加者 佐々会長、折井前副会長
(山形) 村上勝太郎、加藤達男、
(福島) 中島正夫、後藤泰治、河上銀治、(越後) 斉藤平七、鈴木敏雄、(信濃) 蒲生明登、原 喜彬、
角田啓蔵、(山梨) 百瀬舜太郎、斉藤俊哉、山寺義雄、許山 隆、清水利夫、猪股鎮夫、(静岡) 山本朋三郎、市野 弘、望月福次、(東海) 尾上 昇、中世古隆司、湯浅道男、
小川 努、和田政司、中田晴紀子、
中世古直子、(富山) 石坂久忠、(岐阜) 高橋達雄、(関西) 桑田 結、
村井 葵、久野英一郎、小林治俊、
三上智津子、中谷絹子、(東京) 板倉健二、高本信子、河村憲二、鈴木郭二、大峰芳枝、関塚貞亨、石橋正美、西村政晃、坂本正智、神崎忠男、伊丹紹泰。

(坂本正智)



図書 紹介

山と谷へ

—中京山岳会五〇年史—

昭和初期の登山といえば、生活に余裕のある一部有産階級の道楽と目されていた。一方でそのエリートに対し反骨魂を抱いて、登山を志向していた人達もいる。中京山岳会の前身である「ベルグロイテ」や「三菱重工名古屋航空機グループ」の意識の底流にはそれがあつたという。だが世間の眼からはこの人達もまた異質な人々であることには変わりなく、少なくとも

科学研究委員会第十三回講演会

(自然保護委員会共催)

山岳における危機

国際山岳会々々長

Jack D. Ives 氏

昭和五十七年三月十二日(金)十八時半よりルームにおいて標題の講演会が行なわれた。国際山岳会(IMS)とは、ユネスコや国連大学の後援のもとに広く山岳環境を調査研究し、環境の保全や、登山者への情報提供あるいは一般教育への寄与等を目指す組織である。当日は国連大学からMacDonald氏も出席され、佐々会長の挨拶の後、筑波大学地球科学系の小野有五委員による適確な通訳により会は進行した。プロローグの百数十枚に及ぶ美しいスライド映写の効果も相俟って会の雰囲気は大いに盛り上がり、講演終了後活発な質疑応答も行なわれた。

講演要旨 IMSは昨年発足したばかりの会であって、日本山岳会をはじめ米英仏伊等の山岳会など広く山岳を愛好しておられる方々や、科学を通じて山を見ている方々の両方に働きかけ、山岳環境についての認識を深めると共に、登山活動を愈々盛んにすることを目的としている。

今日は私共の主要テーマの一つである山岳における危機的状態について幾つかの地方を例にとつて訴えたいと思う。

(1)ネパール

チョモランマやカンチェンジュンガは神々しいまでに美しく、私共の精神活動まで鼓舞して呉れるが、この数十年来自然によっても人工によってその環境は大きく破壊され、生態系や住民の生活体系までおびやかされて来ている。

たとえば標高一千メートル付近のカカニ地域(カトマンズ近郊)では一九五〇年以降三十年の間に実に

森林の60%が伐採されてしまった。これは一つには人口が急増したためで、直接的には薪用その他のために森林が無計画に伐られたことによる。また道路建設によっても山崩れや、それによる河川の侵蝕、沈殿作用が促進され、種々の災害もたらされた。一方三日間に五〇〇mmといった豪雨に見舞われ、二千人の死傷者を出した他、一千万人以上で道路が寸断されさらに二次的には下流のガンジス平原に大洪水を惹き起こすといった自然災害も見られた。間接的には人口の増加に伴って斜面の段々畠を拡張する必要性に迫られ、次第に急傾斜の土地に段々畠が作られてゆき、あるいは薪を運くまでに行きたくため、牛馬の通過できる広い道を建設することになり、これらが山崩れや鉄砲水に一層拍車をかけることにもなった。現在この地域はユネスコによる自然災害防止のための第一の調査地域に選ばれている。

第二の調査地域は標高二千メートル付近のナムチェバザール近郊である。エベレスト・グーホテルの後方でも薪用に多くの樹が伐られ、景観が一変しているが、現在では暖房炊事等すべてガソリンで購置されている。それでもなお森林の破壊は続き、これら森林の再生は気候的に殆ど不可能なので、事態は深刻である。アマダプラムの見えるゴキキ地方には二つの河の土砂流が河をダムアップして出来たゴキキ湖がある。これらの土砂流は、水でダムアップされた水が氷の融解と共に一時に流れ出すために起こる現象である。クーンブ地方にはこのような氾濫のおそれのある河岸に新しく茶店などでき始めているが、極めて危険な状況であるといえる。何年目かに確実にやってくる災害を人々は決して忘れてはいけぬ。

(2)チベット高原

世界有数の乾燥地域で、人々は燃料や水をどうして得るかが最大の問題である。次第に灌木まで

登山が大衆化した現在とは、彼らを見る眼を異にしていたであろう。

ともあれ昭和十三年に前記二つの山岳会が合併して、中京山岳会の名のもとに再発足した。日本山岳会でも創立以来八〇年を数えていないこと思うとき、遡って五〇年の歴史を有するといえ、中央と違って名古屋という一地方での活動としては特筆に値する。編者が「五〇年も前のことは、なかば『忘却の彼方』になりつつある。多くの私たちの仲間の血と汗の結晶を、何とかしてこれ以上失いたくない」と語っているように、五〇年の旧きにわたる資料の蒐集は容易ならざるもので、現にごく初期の記録は資料の散逸のために掲載されていない。一介の山岳人が地道に一生を通して成し得たものでも、集めてみれば大変な量であるのと同様に、山岳会なる団体が出来る仕事も膨大だ。

特に中京山岳会の活動目標の一つが、一般登山者の育成にあったということ、山岳会本来の登山に加え、山とスキーの夕べや山登り講習会の開催、鈴鹿の山々や御嶽、木曽駒ヶ岳の開拓にと、その行動範囲は多岐にわたっている。また戦時下には鉄かぶとを被り鉄砲を担いで岩登りをするくだりなどは、今昔の想いに駆られるものだ。このようなゆるぎない先人たちの活動が、今日の山岳界の礎石

を築いたはずで、一登山団体の五〇年史に留まらず、わが国登山界の趨勢を垣間見る思いである。山岳会の動向に疎い筆者でも、中央のそれは折に触れて知り得る機会があつても地方の場合、同じ地域で活動しながら、他の会の動きまでは知り難いもので、直接の関係者ばかりでなく、部外者にとっても貴重な資料である。

ただ、資料の総てを当時の有りのままに遺そうとするあまりに、判読不能な箇所が散見されるが、その意図するところは十分に理解できるものの、さらに工夫すべきではなかったか。また縦書きの資料が連ページに渡るとき、二ページ分を横向きに印刷すれば、割付の不自然さが解消されて、もっと読み易くなったのではなからうか。

昭和五十七年二月一日、中京山岳会刊、B五版、本文四〇〇ページ、写真多数。

(安藤忠夫)

Ways to the

Wilderness

ニューギニア及び南極に遠征し、ニューギニア南アルプスの山を数多く登頂したフィリップテンブルの旅行記であり、美しい写真入りのガイド・ブックである。

ここには自分の脚で実際に歩いた四五〇の山、谷、森などの特

薪にされ、農耕地までせめられるに至った。これを解決するため、現在では地熱発電や、砂丘地形における地すべりの防制対策などが試みられている。

(3) 天山々脈

蘭州氷河凍土研究所(施雅風所長には昭和五十五年十月当委員会の講演会で話して頂いた)が中心となって氷河や雪崩の研究を行なっている。ウルムチ付近ではキルギス族が放牧を行なっているが、ここでも森林の伐採が行なわれるので雪崩道が起り易くなっている。このため、道路が雪崩道を横切る所にはフェンスを取り付ける等の工夫がなされた。緩傾斜地に道路を作ると土中の水が凍結し、それが斜面を流れて落ちる流土(solifluction)の現象も見られるので、道路の選定にも配慮が必要である。

(4) チェンマイ山脈

黄金の三角地帯と呼ばれるこの地方は降雨の激しい地域である。ここでも人口がコントロールされて居らず、急傾斜地まで耕地化されると共に、土地の侵食が促進され、土質も保存されず、次々に荒地化が始まっている。これに対し、タイ国とユネスコの協同で調査研究が進められ、現在菊科の植物を植えて地すべりや土質を保存しようとして、土地の傾斜ごとに降雨量と流土量の関係を調べてオーバーユースに警告を発する等の試みが行なわれている。

(5) 以上幾つかの地域について見て来た自然災害の

徴が詳しく記されて、旅の愉しさを余すことなくわれわれに教えてくれる。特に観光ルートに入っていない北島のワイカレモアの山々も紹介され、ニュージーランドの観光地とさえ思われているクック山地方の南部をさけて、余り観光

パターンは、南米やアフリカその他世界各地の山地についても言えることで、私共は国際的な規模でこれらの問題を取り上げて行くべきであろう。勿論自然環境の保持と同時に山地住民に対する影響を考える必要がある。この意味では、自然科学と同時に社会科学的研究も必要である。また農民と林業経営者、高地族と低地族、さらに高地住民と登山者も互いに相手のことまで考えて活動すべきである。

ヨーロッパのアルプス地方には古くから人間が住んでいたが、現在でも自然環境への人間の力はいり方が少なく、家屋なども環境にマッチしている。これら自然との調和を図る生活方法は大きい参考にすべきであると思う。

いずれにせよ、凡ての分野の人びとが協力して危機的状況にある山岳環境の保全に取り組むならば、その労は十分報われるものと私は期待したい。出席者 J.D. Ives, L. MacDonald, 吉野正敏、沼田真、田中薫、小野有五、徳久球雄、佐々保雄、田口二郎、渡辺兵力、国見利夫、中村純二、中保、小林詢、岩田修二、清水長正、小野寺恵子、神谷光昭、武田満子、松沢節夫、山川信之、田村光穂、大沢雅彦、酒井徹哉、柳林実、原芳生、春田俊郎、斉藤健治、梅野淑子、小西奎二、関口周也、近藤緑、山口一孝、高遠宏、中野守久、勝尾光一、漆原和子、斉藤かつら、平井拓雄、野田憲一郎、西村政晃、中村あや、沢井政信、木名瀬亘、近藤信行、高橋詢 他。(中村純二)

ルートに入っていない裏側即ち、ウエストランド国立公園内の山小屋の所在なども記しており、もう一度ゆっくりとニュージーランドを歩こうと言うハイカー連には誠に便利な案内書である。彼は巻頭にこう述べている。

「近年、多くのニュージーランド人が余り知られていない山岳地帯や森林、海岸辺にリクリエーションや精神休養を求めに出かけるようになった。そしてわが国の自然環境の価値を改めて認識し、経済発展の

今年もまた上高地山研で逢いましょう！

不潔な手から護ろうとする大衆の努力が始まってきた。人々はほこりっぽい遠い道を運転し、



その終点で車を降りて山や溪谷に入る。そこで自然の優れた遺産を発見し、その脈搏にふれる。

この本はわが優秀な国土を歩き、その景観を描写した人々に永遠の思い出を与えるばかりでなく、今からその第一歩を踏みだし、年令を越えて、遙か彼方に在る茫漠たる原野に足を入れようとする人々にとって、美しき刺激とならんことを希望するものである。

八ツの徒歩山道は未経験者でも、一、二名の経験者をリーダー

ーとするならば、かなり容易に歩けるコースである。ニュージーランドの知られない裏側で大きな足跡もなく、小屋も手近にある安全なトラックである。この八ツのコースは無数に変化した地形と植物成長、湖水、火山、河川、峡谷を通り、キンボウゲ、コケ、岩石、藪、海などそしていつも絶えず山を眺めながらのハイキングである。

私は運よく全行程をふた夏で歩き終えたが、諸君はそれよりも長いかかるかも知れない。しかし多少の冒険を覚悟してもこの国の比類ない景色を発見されることを期待する。」

同案内書には彼の素晴らしい写真と共に左記方面の詳しい地図も押入され、なんの汚染もない自然の無限美をこれで知ることができると信じるものである。

Wakaremoana Tongariro
Heaphy Copland
Rees-Dart Routeburn
Hollyford Melford
(佐藤テル)

Land of Mountains
Tramping and Climbing
in New Zealand

著者の Peter Radcliffe は一九

六五年に首府ウエリントン近くのタラア山脈の縦走から始め、その後殆どのニュージーランドの山岳地帯を歩き、登頂に成功している。一九七〇年にアンデスへ遠征し、一九七八年より九年にかけて南極の学術調査隊の五〇人の科学者に対し安全責任者として三ヶ月南極に滞在した。彼は教師としてよりむしろ登山及びトランピング(徒歩旅行)の講師として広く知られている。

彼はこの本の序文でこう述べている。

「この本は私の山岳地帯の徒歩旅行と登頂の個人的な報告であり、これが総てを網羅しているのではない。中に記されている山岳や、その地方よりも、もっとよく人々に知られている所もある。また、かつて殆ど知られていない所もある。ただこの本は今までに踏みかためた道しか歩かなかった者への新しき誘いであり、専門的なガイドを連れずに歩ける場所や、われわれの国立公園を探索しようとする人々への新しき可能性を示唆するものである。既にこれらの地方の風景を愛する頑張り屋には記憶を甦えらせ、また、そこに容易に行きつけるにもかかわらず、まだ知られずに隠されたわが国の壮観な美を紹介することにある。

い徒歩旅行を述べると共に、かなり険しいアースパスの冬のトラバースや、クック山の困



カット／芳野満彦

難な氷雪の登頂など、一つ一つが異った魅力をわれわれに訴える。

山登りの技に対する訓練見習期間は長く、そして登山用具に熟練すること、またその使用に自信を持つことなど、自己開発に努め、如何にして最善を作り出すかを知るには非常な時間と経験が必要である。だから初歩の登山者は先ず低地のやさしい地方を選び、そこから始めることをすすめる。

或る地方では、特に夏の期間人出が多く、山小屋も不自由なく使える。また一週間の旅の間、誰にも会わずに歩ける地区もある。人里遠い山で自然災害に逢ったら如何にうまく処理するか自分のちえの見せどころである。実際に進退きわまつた時、

自己の才覚でそれを切り抜ける昔からの手段は今日でも最善の方法である。

登山やトランピング(徒歩旅行)は自己を成長させる機会をあたえ、挑戦し、困難を克服させ、興奮に震えさせ、そして生命の喜びを感じさせるものである」と。

彼はこの序文のあとに特に「素人のために」の頁を割き、ニュージーランドの岩につき、渡渉、雪洞、地固、天候、また雪質に関する注意等、あらゆる場合の忠告を



黒百合平の木魂祭

米川 正利

黒百合ヒュッテへ登って行く途中にあった樹令数百年と思われるダケカンパの巨木が倒れたのを機会に、屋久島の宮の浦にある木魂神社にあやかって、毎年六月の第四週の土曜、日曜を利用し木魂祭を行なおうと思ひ立った。この古木の数百年の歴史を記念するとともに、毎年六月、この頃になるとこの辺一帯に咲き競う黒百合やキ

細かに書いてある。

末尾に地図は何処で入手するか、小屋の予約は、登山用具店は、山岳ラジオの貸所は、ガイド組合所は、天気予報サービスは等々の住所及び登山用語の説明なども付け加えている。

特に一五〇枚の山岳写真真は英語になじみの薄い人々にも深い感銘と印象をあたえるものとして一読、一見の価値ある本と信じておすすめしたい。

(佐藤テル)

バナシヤクナゲがこのお祭りを一段と引き立てるものと思ったからだ。

当日は植物、地質などの専門家に記念の講演をお願いして、参加者百名近くがこれを聴き、その後懇親会を行ない、翌日の日曜日には黒百合平近辺の二カ所に、シラビソ、カンパ、ナナカマドを植樹した。

できれば毎年この木魂祭の日に合わせて植樹もし、自然保護の趣旨に沿った催しとして続けてゆきたい。

広くこの趣旨に賛同する会員諸兄姉のご参加を期待する次第です。

なおこの古木の倒れた跡に

「先人植樹、

後人榮涼」

と書いた立て札を立てました。



シナノキンバイと槍ヶ岳／吉阪隆正

空からの白馬岳

早乙女緩次

ヘリコプターが飛び発って約一分、山麓に低迷する雲海を抜けると、空間はたちまちの内に快晴の陽光の下に開け、新雪まばゆい白馬連峰が、波打つ雲海の上に屏風のごとく立ちはだかる。

大雪渓は機の足下、遠く見える山なみは、総て雲の上に姿を現わして、今日の天候のたおやかなるを予告する。

ここ数日間の里の冷え込みと、二日前の猛吹雪の天候の激変はどこえやら。

微風さえ感じられぬ白馬岳稜線

の雪上に、機は八分後に到着した。

ヘリコプターの飛び去った後の岳の静けさは、不気味な程であり、音といえはたまさか餌をついばみにやって来る岳スズメの羽音くらいのものだ。

雪の消えた岩の狭間の空間は風を寄せつけず、そこには可憐なウルップソウやチシマギキョウ等の夏を呼ぶ高山植物が早くも咲いている。

日差しも強くなった昼近く、新雪の載った雪溪の下から溶けてにじみ出た清水が、流れを集めて小さなせせらぎを生じ、瀬音となつてあたりの静けさを打ち破り、真星の情景を演出し始める。

午後、しばしの憩を求めて山頂に行く。雲海の遠方北々西に、能登半島の先端まで手に取るようにくっきりと、北方海上には佐渡の島影の浮かぶのが望見出来た。

東の空に浮かぶ半月、直下には上昇気流に乗り谷間から湧き上がる優勢なガスが、速度を早めて稜線を目指し、夏山のシーズンを予告する。

終日の快晴に見舞われながらも、未だ消えやらぬ新雪に新しい踏み跡を残して、山頂を立ち去った。

夜、南天にある半月が杓子岳の頭上に位置し、周りに無数の星屑をちりばめて、残雪豊かな山なみを見下ろす。

深夜の雲海の上に、ひときは抜き出た剣・立山の峰々が岳の夜景に彩りを添える。

真星の瀬音も消えて、時折り通り過ぎる稜線の風が冷く頬をよぎる。

早晩、再び頂上に立つ。東北方の空は茜色に染まり、七月最初の太陽が静かに昇り始める。午前四

夏 雲

小林碧郎

灯蛾^{とうが}松ひつつ早発ちの地図ひらく
目細鳴く雪溪を攀ち昼ふかし
夏^{なつ}焚^やく簪^{かんざし}に巢立ちの岩ひばり
落石に飛びくる声や岩枯^{いわく}梗^{えい}
雷鳥^{らいちょう}の雛も砂浴ぶ縦走路
這松原^{このまつがは}四方に雲湧く芽ぐり
胸冷ゆるまで寝袋のいなびかり
雲海^{うみ}のそだつを見たり真夜の月
雪橋^{ゆきはし}を越ゆるに重き下山の荷
減らぬ荷に膝ゆるびゆく道をしへ

時三十分だった。

色濃く、部厚い雲海のほんの僅かばかりの切れ間から浮上したヘリコプターに再び乗って、仕事をかねて登った白馬岳を去り、五分後、里へ戻った。

登れぬ登山者の哀感

藤野 澤祐

官職を辞して、さてこれからゆつくり一人旅の登山が愉しめると思っていましたのに、何が原因か両膝の関節が痛みだしました。

平地の歩行に支障はないのですが、わが家の二階の登り降りにはかなりの痛みを感じます。これは

大変と友人の外科医にレントゲンなど撮り診断を願った結果、軟骨の縮少とかで治すのなら手術

以外はあるまいと驚かされた。山やスキーばかり行つて使いすぎ、もう山に登る年

でもあるまい、歩けぬようになつたらその時のこと」とい

とも簡単に片付けられました。内心この数奴とは思いません

したが致し方はありません。およそ五十年前学生の頃一時

かじった油絵を始めることにしました。絵の道具は全部新品、老婆はびっくり仰天、私

が絵を描くなど思ってもいなかったようです。しかし内心はこれで登山病も終りかと北

ん。

南の山から北の山、四季折々に描いた不味いスケッチをたよりに、臆に思いおこしながら素人の下手な山の絵のいってん張りです。

しかし描きながらその時の山と人の情景が懐しく浮かんて、過ぎ去った年月を想います。

今日もまた二十号のキャンパス



夜叉神峠／松本慎太郎

に絵具をのせて汚していますが、老婆は「飽きもしないで山ばかり描きますね、たまには他の絵を描いたら」と言いながら、それでも良く描けていますよ、と。誉めてくれるのは老婆唯一人です。時

第二十回

木暮理太郎翁碑前祭

昭和五十七年五月十五日、第二十回木暮碑前祭は、新緑の金山平で開かれた。故木暮翁の長女、七十才になられた美枝子さんをはじめ、遠く越後支部、山形支部からまた、島田興、交野武一名誉会員霧の旅会、山崎、野口、松本、鶴岡の各氏、石楠花山岳会の一柳夫人ら、翁ゆかりの方々をはじめ、五十名が参集した。午後四時、石垣会員の歓迎の辞

山村 正光

にはじまり、美枝子さん、山崎金次郎さんのあいざつがあった。

記念感話で、交野名誉会員は、次のように語った。

「大正十二年、日比谷の交差点で、木暮先生にバッタリ会ったことがある。そこで延々四十分、電車の停留所で、立ち話が始まった。先生はつばきをとばしながら、エベレストで遭難した、マロリーとアールヴィンについて話をさ

遭難救助訓練と
岩登り研修会

お知らせ

岩場における遭難救助訓練と岩登りの研修会を計画致しました。

十月の安定した天候の下に奥秩父連山小川山にて行ないます。

研修会は各参加者の山歴と岩登りの経験や希望に従って班編成を行ない、講師には経験豊富な人を予定しております。

特に学生及び若い方の参加を希望致します。

日程 昭和五十七年十月九日(土)～十一日(月)

場所 奥秩父金峯山川廻目平周

行程 十月九日午前八時現地集合(金峯山荘)九時より遭難救助訓練、夕食後ミーティング。

十日岩登り研修、夕食後懇親会。十一日岩登り研修後、午後二時現地解散

費用 一人 一万二千元(宿泊、保険、食費朝夕各二付)、交通費及び昼食は各自負担

申し込み方法 日本山岳事務局で電話にて受付けます(二六一四四三三) 電話受付後申し

込み書を送付します。
なお九月二十八日午後七時より準備会です。

(指導委員会
青年懇談会)

お知らせ

図書交換会に

図書を出品下さい

本年度の図書交換会は、十月二十三日(土)午後二時からルームで行ないます。

図書委員会では現在その出品図書を求めています。山岳に関する和書、洋書、雑誌なら点数の多少を問いません。

ご出品いただける方は、図書委員会あて電話かハガキで下記下さい。(図書委員会)

お知らせ

お話とスライド

シルクロード中国新疆省の旅
田口二郎氏

十月七日(木)午後六時三十分より
(海外委員会)

お知らせ

十月九日の映写会は
十月二日(土)と変更
になりました。

(フィルム委員会)

れた。極東の一小国にあって、すでにヒマラヤに眼をむけていた一人の岳人に思いをいたすと、やはり、先生はエベレストより偉大な先駆者であった。先生がご存命ならば、ヒマラヤ遠征の報告を是非ともしたかった。」

毎回ユニークな研究を発表する神原達夫さんは、本年もドイツから帰国二日目にかけた。そして細かなプリントを配り、木暮翁の七不思議について語った。

先ずは、生年月日の不思議。何故東大を中退したか。ハガキ文学の編集にたずさわったいきさつ。星座にまつわる神話など、またまた新しい問題をなげかけた。

懇親会の部に入ると、新潟や、信州から到来の本場の酒。神谷さんからは、シューマイ、チャーシューなど横浜の味。前山梨支部長三井松男未亡人からは甲州名物の煮貝などのさし入れがあった。

島田名誉会員の発声で、イワナの骨酒で乾杯。料理は、例によって堀口丈夫君の指揮のもと、でるわでるわ。ワサビの葉と茎のおひたし、コンニャクのさしみ。馬さし。タラノメのクルマミ和え、ウドのごまよごし、サラダ、天ぷら。イワナやヤマメのくん製。ワラビ、コゴミの和え物など、大変なご馳走であった。

最後に、有井館の心づくしのおそばは食べもたべたり、百四十枚とはおそれいった。記念品は本年

も、大ぶりのグイノミ。

夜もふけるに従って、前庭の大きなたき火をかこんでの二次会。見あげると、星の数々。明日の天気を保障してくれる。

翌十六日、快晴。早朝出発の金峰山組は五時、みずがき山組は七時。散策、茅ヶ岳組は八時半、金山をあとにした。

主力は、先ず大明神開拓地の深田公園で深田久弥氏の文学碑前で先生をしのび、あと茅ヶ岳に登る。今回の特筆すべきは、八十四才の野口末延ご夫妻と、島田名誉

会員の登頂であった。お三人の久恋の山、登頂を祝い、深田先生の冥福を祈って乾杯。指呼の間、金峰山、八ヶ岳、南アルプス、甲府盆地の彼方には富士山。めぐまれた記念山行を終り。夕刻、甲府駅で解散した。

裏方をつとめた平井和雄、石垣政雄、岡部みち子、山本稔、篠原健夫、望月弘子、今井洋地、柴田尚、内田婦貴子、堀口丈夫、橋田謙二、橋田君衛、山村秀子の各氏に改めて感謝したい。



木暮翁碑前に立つ霧の沓会のメンバー・撮影 山村正光

み、交野武一、小林碧、神原達夫、一柳静江、下川千恵子、金山淳二、井口正男、松本熊次郎、北村武彦、萩原賢司、名児耶達男、高橋晋作、鳥居亮、小林由美子、野口末延、鶴岡元之助、木村俊博、山崎金次郎、大野盛彦、斉藤健治、大野純子、斉藤平七、岩堀瑞子、岡部太郎、高田真哉、木暮美枝子、神谷量平、後藤幸子、後藤典重、宮下啓三、島田巽、野口よう、塚原、山村正光、以上五十名。

報告

ニペソツ山

北海道支部

今年の北海道支部山行は、裏大雪のニペソツ山(二、〇一二・七m)で行なわれた。

七月二十三日(金)地下鉄大谷地駅から、マイカー五台に分乗し針路を北へ、三国峠經由幌加温泉へ、小雨を突いて二七三号線を走る。参加者全員集合したのは、七時三十分であった。続いて明日の好天のために盆を重ねる儀式が盛大に行なわれる。

二十四日(土)午前五時、幌加温泉を出発、本流林道から十六の沢林道終点杉沢出合まで、三十分程で到着、身じたくを整え登山道を登る。小天狗の鼻をまき、岩間温泉歩道に合し、コルで一同の足並を整える。天狗からは、雲間より山容の一部が現われ、そしてガスに掻き消されるが、雄大な山稜は望まれる。ミルクセーキで元氣をつけ頂上を目差す。正午過ぎ全員登頂する。二等三角点の標石も懐しい。昨夜配られた小冊子には、十七年前、深田久弥氏と一緒に、ニベソツ登頂記が転載されている。支部緑りの山である。握手、万才、乾盃、記念撮影、昼食と忙しい。下山は天狗の登り返しを強いられる。天狗の泉で喉を潤おす。天狗の頂上ではミルクセーキ、オンザロック、パインウイスキー等怪しい飲物が配られてくる。

林道出口では高山植物の検査で臨検を受けた方もあるが、無事幌加温泉に戻り、入浴後、賑やかで盛大な締め繰りの懇親会が夜更けまで続いた。

二十五日(日)いよいよ愉しき

会務報告

7月理事会

7月5日午後6時30分
本会・ルーム

出席者 佐々会長、渡辺、田口副会長、神崎、伊丹、西村、松家、赤松、高本、川上、小倉、中村、岡沢、菅沢、高橋、河村各理事、太田、小倉各監事、小原、佐藤、村本各評議員。

(委任) 大倉、水野、鈴木、田村各理事、松丸、大塚各評議員

報告事項

▽会務報告、ルーム夏期休暇自八月九日至十五日、各支部より近況報告が逐次集つてきている(総務)▽各委員会報告(資料配布)うち

主な点、(1)総務・七月十七日に本年度委員会々議を開催、支部懇談会の経過報告(資料参照)、(2)図書・「日本登山記録集成」出版の件、図書委としては本事業は有意義な仕事であるから協力したい。但し法律関係について慎重にしていきたい。この件につき、各理事、監事、評議員より種々の意見がだされた。結論として、今回の事業の編集委員会顧問の一員に田口副会長がなっているから、山岳会の意向を出版社に伝えることを田口副会長に一任することにした、(3)海外・十月にネパールで開かれるUIAA五十周年、ネパール山岳協会十周年の祝賀会についての対応を海外委に一任する、(4)東北地区ブロック会議が九月十一、十二日に行なわれる予定、青森支部設立の気運もあり、東京からの多数出席を期待したい(会長報告)。

ルーム日誌 (57年7月)

1日(木) 海外委集会「西丸震哉氏南極の話」
3日(土) 学生部集会
5日(月) 理事会
6日(火) 婦人懇談会
7日(水) 自然保護委員会
8日(木) 学生部避難対策、医療講習会
12日(月) フィールド委員会
13日(火) 婦人懇談会、総務、集

14日(水)	山研委員会
15日(木)	会報編集委、会員懇談会
16日(金)	科学委員会、小野有「小野」と断層
19日(月)	図書委員会
20日(火)	婦人懇談会
21日(水)	三水会
22日(木)	ボゴダ登山隊壮行会
23日(金)	科学研究委、海外委
27日(火)	婦人懇談会
29日(木)	書評委員会
30日(金)	今月の来室者42名
14日(水)	田辺主計

山岳洋書購入のお知らせ(つづき)

図書委員会

Whymper: Travels amongst the Great Andes of the Equator with Supplement, 1891
Conway: The Bolivian Andes, 1901
Wallace: Malay Archipelago, 1869
Rambles in High Savoy, 1927
Abruzzi: The Ascent of Mount St Elias, 1920
Turner: My Climbing Adventure in Four Continents, 1910
Lawrence: Seven Pillars of Wisdom July 1935, (August 1935)
F.S. Smythe: Climbs and Ski Runs, 1929
Kamet Conquered, 1932
The Spirit of the Hills, 1935
Camp Six, 1937

1956

A Camera in the Hills, 1939
My Alpine Album, 1940
Edward Whymper, 1940
Mountain Vision, 1941
Alpine Ways, 1942
Snow on the Hills, 1946
Rocky Mountain, 1948
Swiss Winter, 1948
The Kanchenjunga Adventure, 1930
Weston: The Japanese Alps, 1896
Weston: Japan, 1926
Steinitzer: Japanische Bergfahrten, 1918
長谷川伝次郎: ヒマラヤの旅, 1932
上原芳太郎編(西本願寺): 新西域記(上・下), 1937

あとがき 会報四四四号で201号から300号までのバックナンバーのうち、欠号となっている分を譲って頂きたいとお願ひ致しましたが、何人かの方々から無償でご協力を頂きました。お蔭様で全部揃えることが出来ました。製本し保存いたしたいと思ひます。どうも有難うございました。(岡沢)

昭和五十七年九月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五―四

サンビュウハイツ四番町

発行所 法人 日本山岳会

発行者 佐々保雄

編集代表 岡沢祐吉

電話東京(201)四四三三

振替口座東京三一四八二九番

印刷所

東京都港区赤坂一丁目三番六号
株式会社 技報堂